

英語可算性のダイナミズム その身体的・認知的基盤と言語運用からの説明

これまでの英語の可算性に関する先行研究 ([1-8]) では「個性性」「境界性」というパラメーターのみで当該名詞句の可算性が決定され、そして事態をどう捉えるかという話者の事態解釈によってその個性性の有無は決定されるとの考えが大半であった。それに対し本稿では、認知言語学のパラダイムに依拠し以下の主張を行う。

- (1) (i) 「数え上げ」という認知的・身体的行為から可算性を問い直すと、可算性を決定づけるもう一つのパラメーター「事例の複数性の捨象」の関与が認められる。
(ii) そのパラメーターが、言語運用の談話・語用論的側面からダイナミックに規定される例が広範に存在する。

(i)に関して：

計数化（数え上げ）とは数学の集合論においては、「ある集合の個体に対して自然数を一対一で写像していく行為」である ([9]) が、人間が行う認知的行為として考えるならば以下のように捉え直せる。

- (2) 身体的・認知的行為としての計数化とは、あるカテゴリーの成員として概念化した個体群に、自然数を一対一で対応させる行為である。ただし、(i) カテゴリーの成員が単一ではなく複数存在し、(ii) ある成員のどこまでが1と対応するのかが予め定まっている。

まず、条件(i)カテゴリーの成員が単一であるならばそもそも数え上げる意味が無い（「ここに一人の男/^{*}チョムスキーがいます」）。また、(ii)どれくらいの量の水を1と対応するかが話し手と聞き手の間で定まっていない場合には計数化ができない（cf. 「コップ一杯の/?一つの水」）。

このように計数化という行為を認知レベルから捉え直すと、可算性の議論に有益な示唆を与える。従来可算性の議論で想定されてきた「個性性の喪失」という不可算名詞化のプロセスは、計数化条件で言えば (ii)にしか対応せず、少なくとも以下のような基準を設けることが必要であることが分かる：

- (3) ある類（Type）に対する事例（Instance）複数存在することが可算性の条件である。

このような条件を設けることで、従来可算性の研究対象にさえされていなかったような以下のような言語表現にも、不可算化の自然な動機付けを付与できる。

- (4) a. 固有名：*John, Einstein, America* (cf. *an Einstein*)
b. 唯一事物：*heaven, hell*
c. 歴史的事実：*Ottoman occupation, European overseas exploration*
d. 役職名：*He was appointed as **director** of Public Prosecutions.*

特に、(4d)は注目されるべき現象であり、これは(i) これまでの指摘と異なり「補語位置」でなくとも使用できること(cf. [10])、(ii)しばしば大文字で表記されること（as **Director**）、(iii)同じ役職名であっても複数の事例が存在する際は問題なく可算性が付与されること（*They were appointed as research workers*）などがその根拠となる。またそれだけではなく犯罪名（*abduction, burglary, homicide*）、病名（*insomnia, diarrhea, malaria*）、その他多くの名詞が不可算名詞で用いられる時には、複数の個別事例が捨象され、その類とし

ての概念のみを表しているからだと考えられる。(cf. *language, culture, difficulty, kindness*等の不可算用法も比較されたい)

(ii)に関して：

従来，可算性の議論はそしてこのプロセスは言語運用のメカニズムから動的に規定される事例が多分に見受けられる (cf. [11])。まず語用論的要因としては，ダイクシスの存在を挙げることが出来る。

- (5) a. 呼格：*Hurry, driver!*
b. 親族：*Dad, mother*
c. 特定の単一時空間を指す表現：*in town, in main street, on Sunday*etc.

呼格的機能を持つ a.は，事実上発話の場の聞き手を指示する表現であるため，事例の複数性は語用論的に捨象されている。また b.や c.のような表現も不可算名詞として用いられた際には自分の親族，自分の町などしか指示できないという点で，ダイクシスの関与を考えない限り説明は不可能となる。

また談話的要因によって事例の複数性が捨象され，不可算名詞化するケースも広く存在する。

- (6) a. be in **blossom**, take **advantage** of something
b. from **generation** to **generation**, **mug** after **mug**
c. be at **bat**, keep/lose **face**

この種の名詞は，主題性 (topicality)・指示性 (referentiality) ([12,13]) において著しくそれらが低下していることが不可算名詞になる要因と考えられる。その証拠として (i)主語としてこれらの語を用いる際には圧倒的に可算名詞になること，(ii)通言語的に見ても斜格的機能しか有しない非プロトタイプ的な名詞句は数性を失うことが多い ([14]) などによる。この種の例は談話的機能の観点から可算性喪失のプロセスを捉える必要性を示す例である。

同時にこの種の名詞 (特に(6c)) は，イベントの参与者としての指示性が低いことから，分析性・透明性が低下し，構文としてこれらの表現がゲシュタルト的に意味が変容していることも指摘できる (cf. [6, 15,16])。**He is at bat, and the bat is very expensive.*と前方照応が不可能であることから考えても，もはや物体としてのバットを表しておらず，「打席に立つ」という一つの出来事を示している。

本研究は言語の認知的・身体的基盤を再考し，言語運用から言語能力を問い直す認知言語学のパラダイムの理論的妥当性 () を示唆する研究として大いに注目される。

[1] Jespersen, Otto. (1933). *The Philosophy of Grammar*. Chicago: Chicago University Press.

[2] Christophersen, Paul. 1939. *The articles. A study of their theory and use in English*. Copenhagen: Munksgaard.

[3] Quine, Willard Van. (1964) *Word and Object*. Cambridge MA: MIT Press.

[4] Allan, Keith. 1980. "Nouns and Countability." *Language* 56 (3) , 541-567.

[5] Langacker, Ronald W. (1986). "Nouns and Verbs", *Language* 63 (1), 53-93.

[6] Langacker, Ronald W. (1987, 1991). *Foundations of Cognitive Grammar* Vol. 1, 2 Stanford: Stanford University Press.

[7] 池上嘉彦 (1993) 「日本語と日本語論 - その虚像と実像 - 」『言語』第22巻第4 - 6号

[8] 樋口昌幸 (2003) 『例解現代英語冠詞事典』東京：大修館書店

[9] Semenza, C. and A. Grana. (2006). "Numbers: Calculation", in Keith Brown (ed.), *Encyclopedia of*

Language & Linguistics Second Edition. Elsevier Science.

[10] 安井稔 (1996) 『英文法総覧』 東京：開拓社

[11] 東郷雄二 (2004) . 「冠詞は意味をどのように区切るか」 『ふらんす』 10 月号

[12] Givon, Talmy (1995). *Functionalism and Grammar*. Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

[13] Du Bois, John W. (1991). “Dimensions of a Theory of Information Flow”. Unpublished manuscript, University of California, Santa Barbara.

[14] Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson. (1980). “The Discourse Basis for Lexical Categories in Universal Grammar”. *Language* 60: 703-52.

[15] 山梨正明 (2009) . 『認知構文論 - 文法のゲシュタルト性 - 』 東京：大修館書店